



サ ラ ナ



No.25 長寿寺報 令和2年12月

枕経とは何をしているのか。

皆さん、ごきげんよう。今回は枕経についてお話ししたいと思います。小値賀では今日でも臨終直後に故人の枕元で僧侶が読経をする枕経の習慣が残っていますが、これにはどのような意味があるのでしょうか。

仏教では、「生き物は、生まれ変わり死に変わりを繰り返すもので、来世にどのような境遇(天や人や地獄など)に生まれ変わるかは生前の善悪の行いによって定まる」と考えます。その中でも、とりわけ臨終に近い善悪どちらかの行いがより大きな影響を与えると考えられ、臨終に際して善き師から善き教えを聞くこと、更には精神が乱れないことが大事とされるようになりました。

それを示すように、経典にはお釈迦様の高弟サーリプッタが篤志信者アナータピンディカの臨終に際し説法を施し、安らかな死に導いたとあります。これが枕経の原型でしょう。枕経をあげてからでないと棺に入れられないと言いますが、それは元々が臨終間際の生きている人に説かれるものであったことから、棺に入れる前を生きていると看做してのことかもしれません。また、お釈迦様がパーティリ村という地において信者たちに説法をされた際に、「戒しめを守らない、行いの悪い人は死ぬときに精神が錯乱している。」とされ、「戒しめを守り、品性ある人は、死ぬときに精神が錯乱することはない。」と説かれています。なぜなら、行いの悪い人はその事によって来世への不安があり、反対に行いの善い人は来世への不安がないからです。

以上の事からも枕経には死の恐怖を和らげる精神面からの要請と、仏教の教義面からの要請があった事が推察されます。仏教には死の恐怖を克服するものがありますが、サーリプッタの臨終説法は教義に関する内容であり、それを理解したアナータピンディカは平素より仏教に触れていた事でしょう。これは見逃せない点です。いずれにせよ、死がいつ訪れるかは分かりませんので、まずは日頃から折り目正しい行いを心掛けていきたいものです。

ご案内

新型コロナウイルス対策として三密を避けるため下記の通り、午前午後の二回に地区を振り分けてお勤めします。檀徒の皆さんはそれぞれご自分のお住まいの地区のお勤め時間をご確認頂き、その時間にお参り下さい。

成道会法要

◆日程 12月8日(火)

午前10時 相津・木場・唐見崎・納島 笛吹西1班・笛吹西2班

午後1時 筒井浦・後目・柳・小浜町・笛吹北・笛吹南・笛吹東・黒島・中村松香丘

◆用意 御仏前・塔婆供養料・霊供膳料

冬至法要

◆日程 12月21日(月)

午前10時 相津・木場・唐見崎・納島 笛吹西1班・笛吹西2班

午後1時 筒井浦・後目・柳・小浜町・笛吹北・笛吹南・笛吹東・黒島・中村松香丘

◆用意 御仏前・塔婆供養料・霊供膳料

位牌所正月支度

◆日程 歳末

◆用意 餅代・霊供膳料・御仏前

12月坐禅会

◆日程 12月6日・13日・20日・27日

◆時間 午前9時～9時半

◆参加 無料

◆申込 不要

釈迦の◀▶生

～episode4～



前回までのおさらい

王子の身分で何一つ不自由なく育てられてきたシッダッタさん(後のブッダ)ですが、青年期に入り、初めて老い・病・死を知り、苦悩します。そんな中に出会った出家者に心惹かれたシッダッタさんの取った行動とは。

王子の出家

さて、出家者と出会ったシッダッタさんは自らも出家したいという気持ちが湧き起こってきます。そんなとき、シッダッタさんの妻が出産し、子供が誕生します。その知らせを聞いたシッダッタさんは「ラーフラ(悪魔)が生まれた。束縛が生じた。」と呟きます。

ひどい言いようですが、今から出家しようとするシッダッタさんにとっては後ろ髪を引かれる存在は好ましくないわけです。とはいえども、王の後継者であったシッダッタさんにとって自分の他に新たな王族の血を引く後継者が現れたことは出家への後押しとなったことでしょう。この点は今日における日本の仏教との決定的な違いであると思います。出家とは本来家族を捨てる行為で、世間の中から外に出るものです。それゆえに父母への孝を説く中国に仏教が伝わった際には問題視されました。しかし、日本仏教は僧侶の妻帯世襲が明治以降に常態化し、寺に生まれた子供が寺を継ぐ、いわば家業のような状態になっています。一般道徳から見ると、それは立派なことかもしれませんが、これでは中にいるままとなり、出家が本来世間からの離脱であることを考えると、疑問符がつきます。

園遊地から戻る最中に、シッダッタさんの気品ある姿を見た女性の一人が、「このような夫を持つと妻の心は安らぐ。」と讃えましたが、シッダッタさんは心中で、「あの女性はこのように言っているが、本当に心が安らぐということは煩惱が無くなったときである。」と出家を決心します。

ここでは心の安らぎが外面的なことでは得られないことを示唆しています。確かに美しいものを観たり、神聖なパワースポットを訪れたりすることによって、心の安らぎを得ることができですが、それは一時的なものです。本当に心の安らぎを得るには内面を自らの努力で磨いていく、自己改革を起こすしかないので。

宮殿に帰り、その日の晩、眠りから目を覚ますと、普段は見目麗しい侍女たちが涎をたらしたり、歯ぎしりしたり、だらしない様子で眠っている姿を見てシッダッタさんは嫌気がさします。シッダッタさんには三つの生存の世界がまるで燃えさかる家のように思われ、一層出家することに心が傾きました。

シッダッタさんは後にブッダとなってから良家の娘に言い寄られたことがありましたが、その際には、「この糞尿に満ちた女が何だというのだ。」と一蹴します。これは結局、人間はどれだけ容姿が良くても皮一枚の話で、その内側には大小便が詰まっており、美人と言っても実際にはただの糞袋に過ぎないと言っているのです。「不浄観」といって、死体置き場に行って、死体を観察したり、自他の身体を骨身に連想したりする瞑想方法がありますが、肉欲への執着を排除する傾向の一端がここに表れています。また、仏教では上から無色界・色界・欲界と世界を三つに分け、我々人間は欲にまみれていますので欲界の住人なのですが、シッダッタさんはこれまでは美しいと思っていたものもそうでないことに気付いてガックリきたのです。ちなみに、この言葉は後に法華経というお経において、「三界は安きことなし、なお火宅の如し」と表現され、野崎島で撮影された緒形拳さん松坂慶子さん主演の映画「火宅の人」のタイトルはここから引用されています。

出家を決意したシッダッタさんは最後に息子のラーフラをひと目見ようと思いましたが、母に抱かれスヤスヤと眠るラーフラを見て、「悟りに至ってから会いにこよう。」と思い、侍者チャンナを起こして、駿馬カントカに乗り、森を目指し、宮殿を抜け出しました。

ここには後に超越した存在として崇められる仏様ではなく、我々と同じように悩み迷う一人の人間シッダッタさんの父としての情が垣間見え、非常に人間らしさを感じます。また、今日なら出家しようと思うなら、まずお寺に向かいますが、ここでは森に向かいます。それは当時にお寺が無かったことと、出家者は森で生活をしていたことを伺わせます。今回はようやくお坊さんとなったシッダッタさんの修行生活のお話です。